

令和7年度かづの未来アカデミー×武蔵野大学発展 FS  
「鹿角市中心市街地活性化」  
若者たちの GOODPLACE  
一中高生と大学生が考える“わくわくが生まれる”居場所づくり一報告書

武蔵野大学

教養教育部会客員教授 小暮真人
データサイエンス学部データサイエンス学科4年 濱崎麗奈
グローバル学部日本語コミュニケーション学科4年 田川蒼太
工学部環境システム学科4年 山田悠人
グローバル学部グローバルビジネス学科3年 鈴木董
人間科学部人間科学科3年 石橋祐弥
グローバル学部グローバルビジネス学科2年 PUN SUBHASH KUMAR
法学部法律学科2年 高平倅輔
人間科学部人間科学科2年 長埜璃緒

1. 「発展フィールドスタディーズ」と「かづの未来アカデミー」

「鹿角市中心市街地活性化」は、武蔵野大学の100以上あるフィールド・スタディーズ(FS)の一つのプログラムである。2021年、コロナ感染症流行下でのオンライン開催を含めると5年目、実際に鹿角市を訪問した活動は4年目となる。

このプログラムは、2020年11月に鹿角市と武蔵野大学が「地方創生に係る共同研究、教育、生涯学習の推進、サテライトキャンパス機能の実現等における協力」について包括的な協定を締結したことをきっかけに始まった。経験上、産学官連携プロジェクトは最初のうちは関係者の意識が高くそれなりの成果を上げるが、続けるうちにマンネリ化し、惰性で続けてしまうという問題がある。そこで、このプログラムは、鹿角と協議してサンセット方式で進めることとした。地域創生の観点から中心市街地に賑わいを取り戻すというテーマを設定し、そのテーマの共同研究を3年間で一区切りとする方法である。終わりを明記することで、限られた時間で様々な資源を効率的、効果的に活用し、目的を達成することができる。また、目的が達成できない時は、なぜ、上手くいかなかったのか問題点を整理し、次のテーマに反映することが可能となる。

鹿角市との協定は、地域創生の推進を目的としつつも、その中心には「若者の教育」と「若者の夢の実現」が据えられている。市では、若者が学び続けられる環境を整備することを重視しており、その象徴が「サテライトキャンパス機能の実現」である。

鹿角市には大学や専門学校などの高等教育機関が存在せず、若者が進学のために市外へ転出せざるを得ない現状がある。こうした状況を踏まえ、市は将来的に、地元にいながらにし

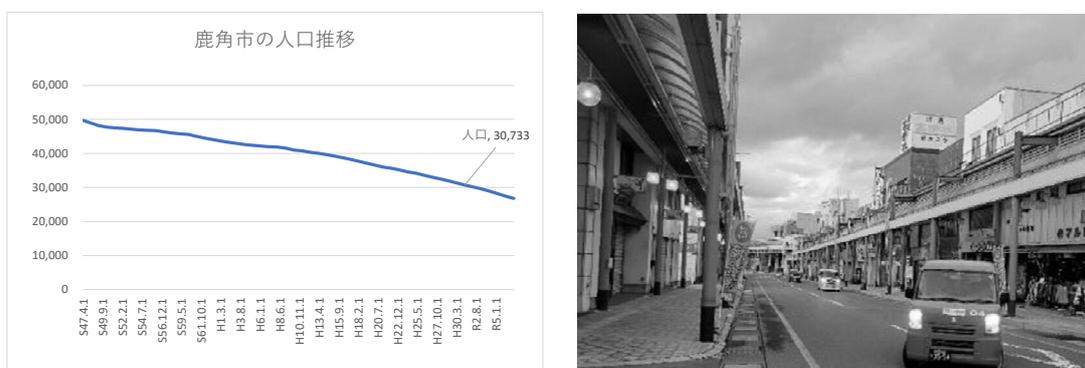
て大学進学の実現できる「サテライトキャンパス」の設置を目指している<sup>1</sup>。

その前段階として、現在はサテライトキャンパス機能を活用し、中高生を対象に教育社会的視点を踏まえた地域探究型教育を「かづの未来アカデミー」として実施している。そして、成果を学生や生徒だけでなく、広く市民にも開かれたキャンパスとするため、市民公開型報告会も開催している。

### 1.1 第1期発展 FS「鹿角市中心市街地活性化」

鹿角市の人口はピーク時に比べて、半減している（図表1）。地域や国における人口減少は、そのエリアの総需要を減少させ、生産や商業を縮小させる。中心市街地問題の多くは、この人口減少を背景に抱えている。

【図表1】鹿角市の人口の推移と中心市街地の様子

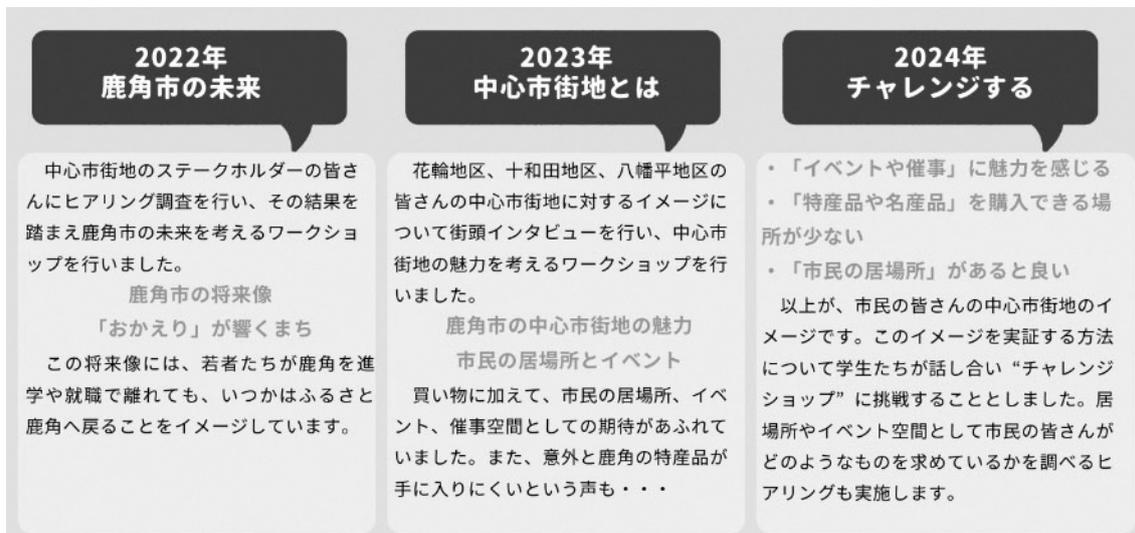


地方創生は様々な政策分野から成り立っているが、中心市街地活性化もその一つである。2022年度から2024年度までの3年間を第1期として、鹿角市の中心市街地の活性化をメインテーマに鹿角市との共同研究を実施した。1年目は鹿角市全体の未来を描き、2年目はその将来像から鹿角市の人たちにとって中心市街地の価値は何かを考えた。そして、第1期最後の2024年度は中心市街地の新しい価値創造のために、中高生と大学生によるチャレンジショップによる実証実験を行った。

第1期のプログラムを総括すると、かつて中心市街地は商店（商品を仕入れて販売する店）が林立した一大商業基地だったが、現在は商店が減少し、飲食店、オフィス、高齢者の施設、住宅、子育て関係の場所など様々な機能をもった空間に変わっていること、つまり買い物の場だけでなく、様々な人々の居場所となっていることを関係者間で共有できたことに大きな意義がある（図表2）。

<sup>1</sup> 市内全ての中学校、高校の代表生徒が委員を務める「かづの未来の若者会議」からは、第1期（令和元年開催）、第2期（第2期）ともに大学設置の必要性が提案され、市長へ提案書が提出されている。

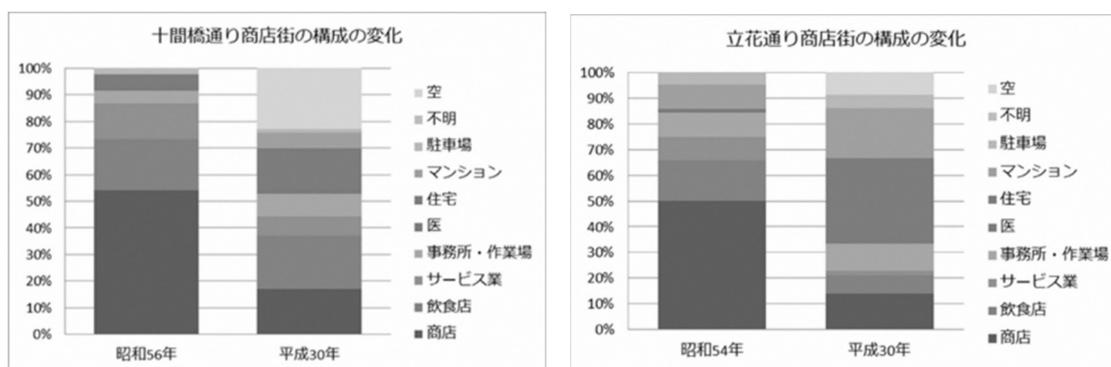
【図表 2】第 1 期研究結果の概要



ところで、商店街から商店が減少し、住宅、福祉施設、事務所など多様な機能をもった街に変わっているのは、鹿角市だけでなく、東京や大阪でも同様である。下記の資料は東京下町を代表する墨田区の二つの商店街について、30 年前に比べて建物構成にどのような変化があったのかを調べたものである（図表 3）。十間橋通り商店街も立花商店街も 30 年間で商店が大幅に減少し、住宅やマンションが増加していることがわかる。

鹿角市の商店街とも比較を試みたが、残念ながら過去に鹿角市で商店街家屋調査を行った記録は見当たらなかった。しかし、歴史民俗資料館に展示されている大正 5（1916）年の中心市街地の真景図を見ると、定量的な把握はできないが、通りにたくさん商店が並んでいるのに比べ、現在は商店が大分少なくなっていることがうかがえる。買い物の街が様々な人がそれぞれの目的で利用する街、様々な人の居場所に変ってきているのである。

【図表 3】墨田区の商店街における建物構成の変化



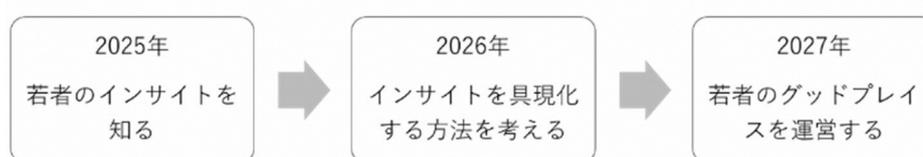
1.2 第 2 期発展 FS「鹿角市中心市街地活性化」

2025 年度から 2027 年度までの新たな 3 年間のプログラム（第 2 期プログラム）では、中

心市街地における新たな価値を創出するため、若者たちが将来に希望を持ち、社会とつながりながら生き生きと過ごせる新たな居場所を「グッドプレイス (GOOD PLACE)」として定義し、若者にとっての GOOD PLACE の在り方について研究を行うこととした。

今年度は、「中高生アンケート調査<sup>2</sup>」と市内の若者に対する現地ヒアリングを行い、居場所について中高生の隠れたニーズや本質的な動機、いわゆるインサイトについてのデータを集めた。2年目は、居場所に対する中高生のインサイトを具現化するアイデアを考え、3年目はそのアイデアを具現化し、若者にとっての GOOD PLACE を創出する方針である。

【図表4】第2期研究の方針



## 2. GOOD PLACE

アメリカの社会学者のレイ・オルデンバーグは、居場所の概念を3つに整理している。第1の居場所は人間が生きていく上での基礎的な単位である「家庭」、第2の居場所は「会社」や「学校」である。そして、3つ目が第1の居場所でも第2の居場所でもない「第3の居場所」である。

第1と第2の居場所は、生きていくため、所得を得るために義務的に過ごさなくてはならない場所である。しかし、第3の居場所は、人が豊かな人間性を育むために様々な人々と交流する場所、つまり「コミュニティ」である。コミュニティは、本来「地縁によって自然発生的に成立した基礎社会」(日本国語大辞典)の意味であるが、最近では、共通の興味や目的を持つ人々が集まり、相互に交流し合う場合もコミュニティとする使い方が増えている。例えば、ベンチャー企業が社内コミュニティをつくり、部門を超えた企画開発をするケースや、アイドルや“推し”のコミュニティでファン同士の一体感を強くするといった使い方である。本報告書の GOOD PLACE は伝統的なコミュニティだけでなく、こうした新しい多様なコミュニティの概念も含んでいる。

ところで、ヨーロッパや日本には歩いて行けるコミュニティが歴史的にあるが、現在のアメリカには歩いて行ける安全なコミュニティがない。その理由にはアメリカが自動車社会であることと、銃社会であることの二つがある。まず、アメリカは第二次世界大戦中、軍需産業により好景気に沸いたが、戦後、軍需が激減し一変して不景気となる。そこで、考えられた景気浮揚策が都市郊外の住宅開発と郊外と中心地を結ぶハイウェイ網の整備である。その

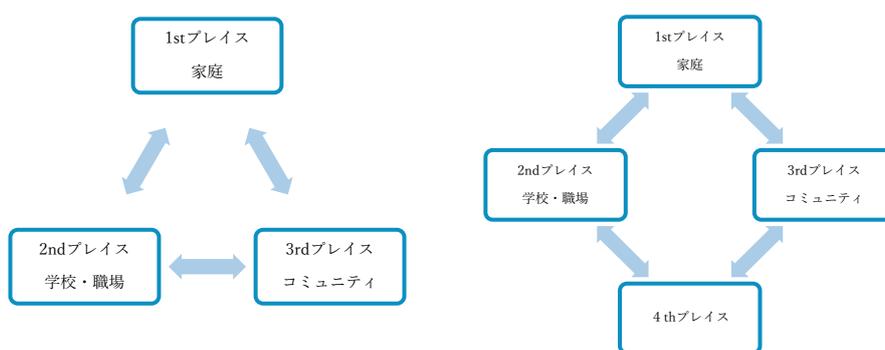
<sup>2</sup> 「中心市街地における若者の居場所 (GOOD PLACE)」に関するアンケート」(調査期間：令和7年7月8日～7月22日)をweb回答方式で実施。回答率は70.7% (776人/1,097人)。

結果、アメリカは名実ともに自動車社会となった。

また、アメリカはイギリス、フランス、オランダなど各国の植民で形成された国家であり、その形成過程で植民と原住民との抗争、植民同士の抗争があり、自分の身は自分で守るという自警文化が根付き銃社会も広く支持されている。この二つの社会の影響により、アメリカには歩いて行けるコミュニティはない。オルデンバーグの研究はアメリカ人にも歩かないまでも、様々な人と交流する場所が必要であるという問題意識から出発している。

そこで、コミュニティの核となり、人々のアイデンティティを強化する重要な要素として、ヨーロッパのカフェやバーのように家庭でも学校、職場でもない「中立の領域」、いわゆる「第3の居場所（3rd プレイス）」という概念を打ち出した。第3の居場所には多様な人々と交流し、人生を豊かにする役割がある。アメリカでは「3rd プレイス」はコミュニティであり、様々な人たちの「GOOD PLACE」なのである。

【図表5】 3rd プレイスと 4th プレイスの関係



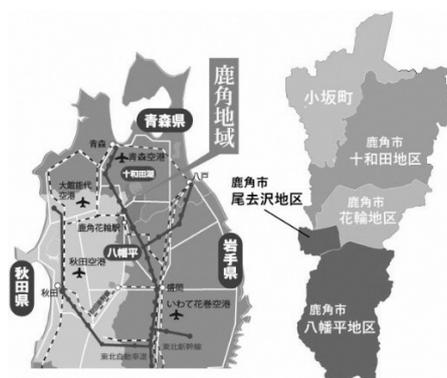
しかし、日本にはアメリカと違って地域にコミュニティが存在する。車社会と言われながらも、基本は徒歩圏により人々が集えるコミュニティ、すなわち3rdプレイスが既にある。そこで、3rdプレイスの研究を進めていく上で次のことが考えられる（図表5）。

- ① 現在の3rdプレイスについて、多様な人々と交流し、人生を豊かにする GOOD PLACE という視点から検証し、課題がなければ一層の充実を図り、課題があれば改善する。
- ② 3rdプレイスが既に存在するのであれば、人々にとってより一層 GOOD PLACE となる「第4の居場所（4thプレイス）」をつくる。

### 3. 鹿角市の現状

鹿角市は1972年に同じ鹿角郡であるが、文化、歴史、社会、経済、自然、環境などを異にする花輪町、十和田町、尾去沢町、八幡平村の4町村が合併して誕生した。その結果、市域は南北に長く、面積は707.52km<sup>2</sup>で全国1747市区町村中、100番目という広さである（図表6）。したがって、地域産業も林業、農業、鉱業、製造業、商業など多岐にわたり、地域のコミュニティも集落ごとに存在する。

【図表 6】鹿角市の位置図



かつの商工会女性部 (<https://kazuno-kurasapo.net/about-kazuno/>)

ところで、居場所は精神的なものや物理的なものの二つの側面から考えることができる。精神的な居場所は祭りなど地域の行事、慣習を通じた地域の人たちの結びつきで、物理的な居場所は地域にある集会所、図書館、カフェ、居酒屋、公園など人が集まり、交流し、過ごせる空間である。

下表のように鹿角市には多くの「まつり」があるのは、それに対応する集落、コミュニティがあることを物語っている（図表 7）。さらに、その一つの地域である中心市街地には花輪ねぶた、花輪ばやし、町踊りなどがあり、地域の人々の精神的な結びつきを強くしている。また、公的にも私的にも多様な施設があり、様々な人たちの交流の場となっている。

しかし、精神的かつ物理的な居場所が形式上は 3rd プレイスだったとしても、集まる人にとって本当に GOOD PLACE になっているかどうかという問題が残る。

【図表 7】鹿角市の精神的・物理的な居場所

鹿角市の現状	
祭りと芸能	中心市街地のサードプレイス
①祭りと芸能花輪ねぶた、②大湯湯泉夏まつり、③毛馬内まつり、④大日宮舞楽、⑤鮎木塚奉納、⑥大湯大人改まつり、⑦花輪ばやし、⑧毛馬内の盆唄、⑨花輪の町踊り、⑩大森親山獅子大権現舞、⑪土深井禊よいり、⑫吉野平のオジナオバナ、⑬小豆沢のオジナオバナ、⑭谷内のオジナオバナ、⑮下川原町踊り、⑯松尾天満宮一台山獅子大権現舞(松尾の湯立て)、⑰湯瀬温泉祭り(湯瀬先破舞)、⑱尾去沢山神社祭典	<b>公共</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>鹿角市文化の社交館コモッセ、MIT PLAZA (鹿角市交流プラザ)、鹿角アメニティ倶楽部ハウス、駅前観光案内所、まちなかオフィス、市場、各種公園・・・</li> </ul> <b>民間</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>喫茶店、居酒屋、ショッピングセンター、ファミレス、飲食店、貸会議室・貸施設</li> </ul>

#### 4. 人口移動

堤研二は人口移動を「個人が出発地から目的地へ移動する」こととし、「移動者は環境の影響で移動の意思決定を行い、フィードバック的に環境にインパクトを与える」としている。つまり、行動心理学的に表現を変えれば「行動は特性と環境の影響を受ける」というレヴィンの法則とも相通じるところがある。

B=F (P,E) : 人間の行動は、その人の個性と環境によって決まる。

B=Behavior (行動)

F=Function (関数)

P=Personality (個性、考え方、行動様式、人間性、人格、個性、価値観、性格など)

E=Environment (環境、周囲の状況、集団の規制、人間関係、風土など)

「転居」、「転出」という人口移動も人間行動であり、その人の個性と環境によって、意思決定され、実際に行動となる。

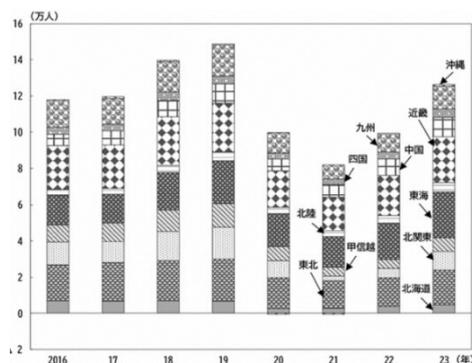
例えば、大学で勉強したいという意思（個性）を持つ高校生は、自分の住んでいる市区町村に大学がなければ、大学のある市区町村（環境）に転出する。最先端のファッションの仕事をしたい人（個性）は、その仕事が集積している市区町村（環境）に転出する。サトウキビを栽培し、オリジナルのラム酒を作って儲けたい人（個性）は、サトウキビ畑があり美味しい水が得られる島（環境）に転出する。

このように転出という行動は、その人の個性や価値観、言い換えれば、その人の人生の目標ややりたいこと、そして置かれた環境によって決まる。

#### 4.1 全国の人口移動

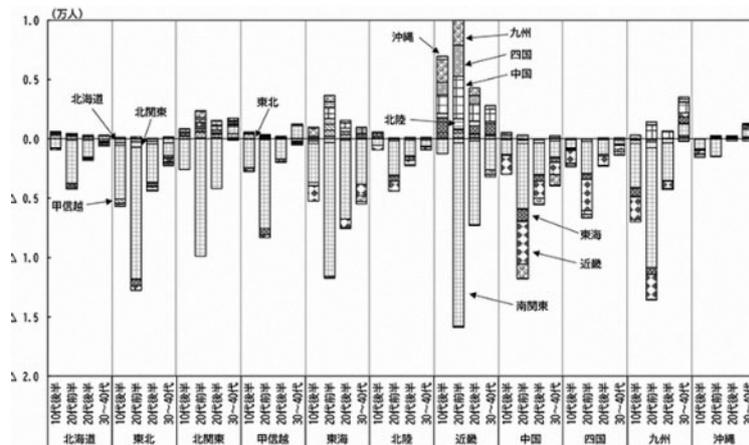
内閣府の地域課題分析レポート（2024年秋号）によると東京圏の人口純流入は、2020年以降、感染症の影響で流入数は減少したが、2023年には2017年を超える流入数に回復している。道府県の人たちの多くが、東京に対して各自の目的をもち、移動という意思決定をした結果である（図表8）。

【図表8】東京圏への地域別人口純流入



地域別・年代別の人口純流入（2023年）を見ると、全国的にどの地域も20代の流出人数が一番大きく、年齢とともに流出人数が減少している（図表9）。

【図表9】東京圏への地域別・年代別人口純流入

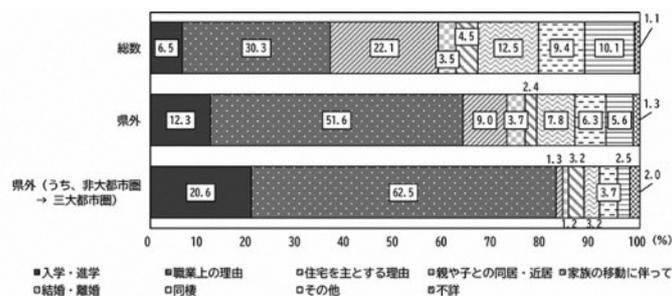


20代の人の移動理由の調査結果（調査対象は2018年～2023年間の移動）を見ると、回答者のうち、県外から現住地への転入では、「職業上の理由」を挙げた割合が51.6%と全体平均より高く、さらに、非大都市圏から三大都市圏への転入では62.5%とより高い割合を示している。

また、「入学・進学」を転入理由に挙げた割合は、全体で6.5%、県外からの移動者で12.3%、非大都市圏から三大都市圏への移動者では20.6%である。

「入学・進学」と「職業上の理由」を合わせると、非大都市圏から三大都市圏へ引っ越した人の移動理由の8割以上を占めている。つまり、若い世代の多くが、進学や就学を目的として三大都市圏へ転入していることが分かる（図表10）。

【図表10】20代の移動理由の調査結果



## 4.2 鹿角市の人口移動

全国の人口移動に対して鹿角市の人口移動を見てみたい（図表 11）。

人口移動には旅行や出張のように短期的なものと、住所異動をともなう長期的な移動（行政事務上の転出・転入・転居）があるが、このレポートでは長期的な人口移動を対象とし、行政の区域を超える転出・転入を扱うこととする。

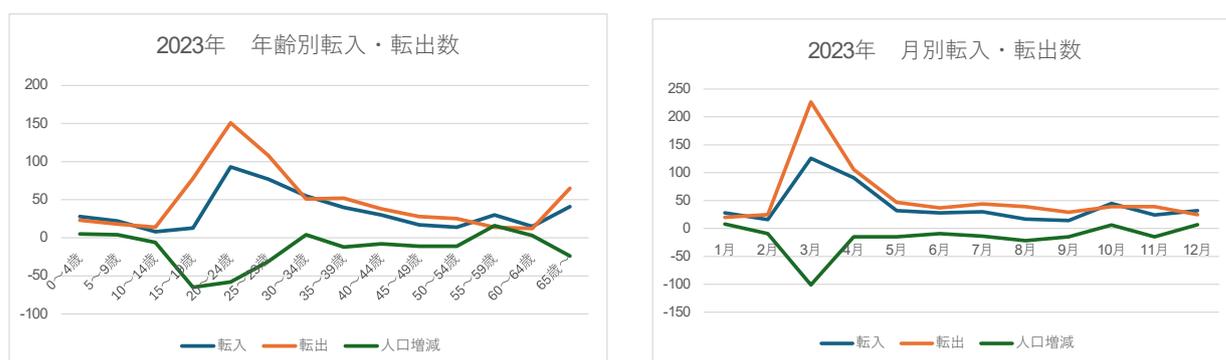
鹿角市は尾去沢鉱山を中心とした鉱山町、また、久保田藩、弘前藩、南部藩の三つの藩をつなぐ交通上、軍事上の要衝地としての歴史をもつ。もちろん、古くからの米どころ、マタギの里なので農業という基盤の上に鉱山、商業などが立地している。

市の人口は昭和 30（1955）年の 60,475 人をピークに減少を始め、昭和 53（1978）年の尾去沢鉱山の閉山により人口減少が進み、令和 7（2025）年 8 月 31 日現在、26,514 人、半分以下になっている。10 年スパンで見ると 2005 年～2015 年に 5,179 人減少、2015 年～2025 年に 6,258 人減少と増加しており、人口減少がより深刻になっている。

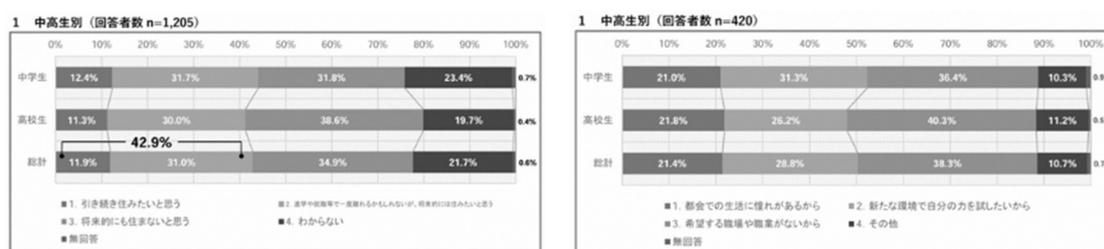
また、人口は、出生と死亡による自然増減及び転入と転出による社会増減の結果、増えたり、減ったりする。鹿角市の転出・転入の状況は、年齢別では就職する 15 歳～29 歳の転出が多く、月別では入学式、入社式を控えた 3 月に突出している。背景として、令和元年度、鹿角市が実施した「まちづくり中高生アンケート調査」では、約 3 割が「進学や就職等で一度離れるかもしれない」としていること、また「将来的にも住まないと思う」理由には「希望する職場や職業がないから」が多くなっていることがある（図表 12）。

つまり、鹿角市も先述の国のレポートと同様、「職業上の理由」、「入学・進学」が大きな理由となっており、その結果、春に転出が増加すると考えられる。

【図表 11】 鹿角市の人口移動



【図表 12】鹿角市のまちづくり中高生アンケート調査の結果



## 5 なぜ、若者の GOOD PLACE なのか

居場所 (GOOD PLACE) は、世代、性別、体質など様々な違いもつ人たちが集まる場であるが、第2期の研究では、多様な対象の中から若者、特に中高生に焦点を当てることとした。「鹿角市から一度は離れるが、いつかは戻りたい」、「戻りたくない」という中高生が鹿角市の中で素晴らしい経験をし、地域への愛着を深めることで将来のUターンの動機付けになるのではないだろうか。この中高生が素晴らしい出会いや経験ができる場所が GOOD PLACE であるという仮説を検証するねらいがある。

稲垣円は「地域に住む人には地域への愛着がある」とし、「地域への愛着」を「地域愛着」としている。愛着は「慣れ親しんでいる人や物に心をひかれ、はなれがたく感ずること」(大辞林) という意味なので、愛着が醸成されるには一般的には時間がかかる。しかし、愛着は人間の内面から湧き出るものなので、「たとえ短い期間であっても地域との濃い関わりを経験したり、地域住民との関わりが繰り返されたり」することで育まれるものである。

この説を援用すれば、鹿角市の中高生が中心市街地の中に居場所を見つけ、そこで素晴らしい経験をし、気心の知れた友人と雑談、勉強、遊び、スポーツなどをしながら過ごすことにより、鹿角市への愛着が深まる。その結果、一度は「職業上の理由」、「入学・進学」の目的で、鹿角市を離れてもいつかは鹿角市に戻りたいと思う気持ちを強く持ち続け、人生の転機に実際にUターンという行動を決断して、自分たちが青春時代に過ごした GOOD PLACE に今度は大人として関わっていくことになる。

【図表 13】 稲垣円氏による愛着の分類

分類	意味	設問項目
地域愛着 (選好)	個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味する	・住みやすい ・好きだ ・雰囲気や土地柄が気に入っている
地域愛着 (感情)	居住地域に対して深く挽かれ、離れがたく感じる程度	・住み続けたい ・自分の居場所がない ・住んでいることは(市民であることは)、自分にとって大切なことである
地域愛着 (持続願望)	地域のあり方そのものに対して“願い”を抱く程度	・いつまでも変わってほしくない、なくなってしまうは悲しい・困る
地域への貢献意欲・態度	地域の在り方への自分なりの関わりや協力的な参画意向	・良く知っている ・地域を紹介したり(産品や製品、場所等)、勧めたい ・よりよくするために出来ることで貢献したい

## 6. 令和7年度発展 FS「鹿角市中心市街地活性化」

以上の現状分析等を踏まえて、2025年から新たな3年間のプログラム、鹿角市の若者のGOOD PLACEづくりの実証研究が始まった。

まず、初年度のプログラムは、中高生は居場所についてどのような考え方をもっているかを把握することが大きな狙いである。そこで中高生に対して、前述の「若者のGOOD PLACEに関するアンケート」を実施するとともに、ヒアリングも行った。ヒアリングは、あらかじめ設定したアンケートの言葉や選択肢ではつかめない中高生の本音、自分でも気づいていない欲求、不満など、いわゆるインサイトを引き出し、それを今後のGOOD PLACEに反映していきたいからである。

### 6.1 中高生の居場所に関するアンケート調査

今回のプログラムに先立って、7月の学期中に、鹿角市の中学生及び鹿角高校の高校生、全員を対象にGOOD PLACEに関するアンケート調査を実施した。その概要と分析を加えたものが下記のとおりである。

- ① 放課後の部活や習い事は、吹奏楽、陸上、野球、ソフトテニス、ビジネスなどが多いが、ほとんどの中高生が回答していることから、中高生は特定の部活や習い事に集中しないで様々な活動を行っている。
- ② 中高生の放課後、過ごす場所は、「自宅」が最も多く、続いて「自宅、学校(部活、自習)」、「学校(部活動)」となっている。
- ③ 多くの中高生にとって、学校生活以外で居心地が良い場所は自分の家である。⇒3rdプレイス、GOOD PLACEには、自分の家では経験できない居心地の良さが必要となる。
- ④ 安心して過ごせる場所には、「話しやすい人がいる」、「顔見知りの人がいる」という人的条件が過半数を超えるが、「一人で静かに過ごせる」、「騒音や人が少ない」など環境を挙げる者も多い。⇒GOOD PLACEには、雑談できる場所と静かな場所が必要である。

- ⑤ 誰かに必要とされていると感じるのは、「感謝されたとき」という結果に対してよりも、「頼られたとき」、「役割をまかされたとき」とこれから起きることに対するものが多い。中高生のモチベーション、責任感の強さが表れている。⇒GOOD PLACE の運営では、中高生の役割や責任があると良いのではないか。
- ⑥ 挑戦してみたいこと、やってみたいことがある中高生は、「ない」、「わからない」、「ある」で三分できる。挑戦してみたいこと、やってみたいことがある場合は、スポーツ、勉強、趣味など多岐にわたっている。⇒GOOD PLACE では、できることを固定するのではなく、中高生の希望を聞いて柔軟に変えていくと良いのではないか。
- ⑦ 公共施設の認知度は、万三公園 2.7%から鹿角市民プール 86.5%まで施設ごとに異なるが、10%を下回る認知度の施設も相当数ある。⇒公共施設については、認知度によりABC 分析を行い認知度が低い施設は目的を確認し、対象者が確実に利用してもらうような対策が必要となる。逆に、認知度が高い施設は利用者満足度の向上を図ることが重要となる。
- ⑧ 中高生がよく利用する施設は、文化の杜交流館コモッセが最も多く、理由は分散している。逆に、中高生が利用しない、利用したくないのは、歴史民俗資料館、まちなかオフィス、鹿角市民プールであるが、その理由も分散している。⇒GOOD PLACE は、中高生のニーズを反映したデザイン、運営を心掛ける必要がある。
- ⑨ 中高生が居場所に求める機能は「友人と話したり、一緒に過ごせる」、「Wifi や充電設備があり、スマホやパソコンが使える」、「気軽に飲食ができる場所」、「漫画やゲーム、音楽などの趣味を楽しめる」が多い。⇒GOOD PLACE に必要な要素として参考にすべきである。
- ⑩ 「静かに勉強したり、本を読んだりできる場所」を求める者はそれほど多くはない。⇒勉強の場はコモッセ、図書館が既にあるからと考えられる。GOOD PLACE では施設内で騒げるところ、静かにするところをゾーニングすることも考えられる。
- ⑪ 「屋外で気軽にストリートスポーツを楽しめる場所」を求める声も一定程度ある。⇒GOOD PLACE では、スポーツというと体育館、グラウンドで行うものという既成概念を修正し、柔軟に対応することも必要である。
- ⑫ 中高生の 9 割が居場所には「気の合う友達がいる欲しい」と考えている。⇒GOOD PLACE には、先ほどの「友人と話したり、一緒に過ごせる」という居場所の機能と合わせると、「友人」と過ごせることが重要である。
- ⑬ 居場所に「話を聞いてくれる大人」、「若者を見守ってくれる大人」を挙げる中高生は少ない。⇒GOOD PLACE には管理上、大人が関与せざるを得ないが、大人が目立つ存在であってはならないと考えられる。

## 6.2 プログラムの概要

1. タイトル  
「若者たちの GOOD PLACE—中高生と考える“わくわくが生まれる”居場所づくり—」
2. 日程  
8月5日（火）～8月10日（日）
3. 場所  
鹿角市まちなかオフィス（武蔵野大学鹿角サテライト推進拠点）ほか
4. 活動内容  
8/5㊤ 9:30-16:00・講義「GOOD PLACE とは」他、大学生とのチームづくり  
8/6㊦ 9:30-16:00・ヒアリング調査、社会実験、中心市街地での体験活動  
8/7㊧ 9:30-16:00・ヒアリング調査、社会実験、中心市街地での体験活動  
8/8㊨ 9:30-16:00・ヒアリング調査、社会実験、中心市街地での体験活動  
8/9㊩ 9:30-16:00・ワークショップ「若者の GOOD PLACE の未来を考える」他  
8/10㊪ 9:30-16:00・クイックプロトタイピング、市民公開型成果報告
5. 研究員（参加者）

武蔵野大学		鹿角市	
氏名	学部・学科・学年	氏名	学校・学年
濱崎 麗奈	データサイエンス学部データサイエンス学科	4 小舘向日葵	秋田県立鹿角高校
田川 蒼太	グローバル学部日本語コミュニケーション学科	4 多賀谷 はるか	秋田県立鹿角高校
山田 悠人	工学部環境システム学科	4 木村 芽生	秋田県立鹿角高校
鈴木 堇	グローバル学部グローバルビジネス学科	3 土舘 市果	秋田県立鹿角高校
PUN SUBHASH KUMAR	グローバル学部グローバルビジネス学科	2 海沼 実羽	秋田県立鹿角高校
高平 倭輔	法学部法律学科	2 成田 裕帆	秋田県立鹿角高校
石橋 祐弥	人間科学部人間科学科	3 縮花 莉奈	鹿角市立八幡平中学校
長埜 璃緒	人間科学部人間科学科	2	

## 6.2 活動状況

今回のワークショップは、鹿角市の中高生7名と武蔵野大学の学生8名が参加し、8月5日（火）から10日（日）までの6日間実施した（図表14）。

初日は、まちなかオフィスにおいて、自己紹介、関係性づくりのあと、鹿角市の現状等について鹿角市からの説明を受け、参加者で共有した。

午後は、下記の3班に分け、ワークショップの進め方、3つのアクションについて説明し、最後に各班のリーダーが中心となり、2日目以降のアクション等について班別に打ち合わせを行ってもらった。

なお、ワークショップの進め方では、議論と対話、垂直思考と水平思考、単解答問題と多解答問題の違いについて確認し、自ら応用できるよう演習を行った。

【図表 14】 かつの未来アカデミー×武蔵野大学発展 FS 参加者

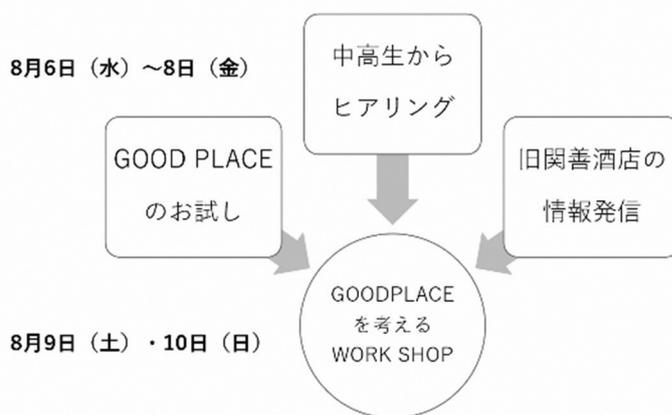
班構成

班	武蔵野大学			鹿角市高校生・中学生			
A	濱崎 麗奈	女	データサイエンス学部データサイエンス学科	4	多賀谷 はるか	女 秋田県立鹿角高校	3
	石橋 祐弥	男	人間科学部人間科学科	3	館花 莉奈	女 鹿角市立八幡平中学校	2
	高平 倖輔	男	法学部法律学科	2			
B	山田 悠人	男	工学部環境システム学科	4	木村 芽生	女 秋田県立鹿角高校	3
	鈴木 堇	女	グローバル学部グローバルビジネス学科	3	成田 裕帆	女 秋田県立鹿角高校	1
	PUN SUBHASH KUMAR	男	グローバル学部グローバルビジネス学科	2			
C	田川 蒼太	男	グローバル学部日本語コミュニケーション学科	4	小館 向日葵	女 秋田県立鹿角高校	3
	長埜 璃緒	女	人間科学部人間科学科	2	土館 市果	女 秋田県立鹿角高校	3
					海沼 実羽	女 秋田県立鹿角高校	2

今回、ワークショップは5日目、6日目に実施し、2日目～4日目の3日間はワークショップのためのアクション、情報収集、体験活動等を行った。

【図表 15】 令和7年度プログラムの流れ

### 3つのACTIONからワークショップへ



#### 6.3 3つのアクション

ワークショップのための3つのアクションは、各班が等しく体験できるよう下図のとおり、ローテーション方式をとった。

【図表 16】令和7年度プログラムのローテーション表

ローテーション表

		居場所実験 旧関善酒店こもせ	ヒアリング	インターンシップ「若者に届く情報と発信方法」 旧関善酒店広間
			コモッセ、MITプラザ、鹿角高校、イトクショッピングセンターほか	
8月6日	9時30分～12時	A班	B班（鹿角高校）	C班
	13時～16時	B班	C班（コモッセ）	A班
8月7日	9時30分～12時	C班	A班（いとくSC）	B班
	13時～16時	A班	B班（MITプラザ）	C班
8月8日	9時30分～12時	B班	C班（鹿角市民プール）	A班
	13時～16時	C班	A班（駅前観光案内所）	B班

【GOOD PLACE のお試し】

旧関善酒店は鹿角高校の通学路に立地しているが鹿角高校の生徒の利用がほとんどない。そこで、生徒がお茶を飲んだり、お菓子をたべながら過ごせる場所をつくり、3日間運営してみた。立ち寄りやすさを考慮して店内ではなく、「こもせ」にテーブル、椅子を設け、無料の麦茶、お菓子を用意し、登下校の高校生を中心に誘客した。また、来客者には居場所についてヒアリングも実施した。

【中高生等のヒアリング】

居場所についてのヒアリングは、鹿角高校、コモッセ、いとく SC、MIT プラザ、鹿角市民プール、駅前観光案内所の6地点とした。ただし、人が少ない場合は、他の場所へ移動しても良いこととした。ヒアリングで聞き取ったコメントは、テキストマイニングで分析を行い、ワークショップで活用し、それぞれの班のアイデアに反映されている。

【旧関善酒店の情報発信】

旧関善酒店は国の登録有形文化財であり、現在、NPO 関善賑わい屋敷が運営をしている。非営利活動として運営するには、多くの市民、関係者の参加協力が必要である。しかし、現状では若者の参加がほとんどない。また、若い世代の見学や利用も極めて少ない。そこで、そこで、若い人が関心をもってもらったり、実際に足を運んでもらう、あるいは利用してもらうための情報発信を考える活動を行った。

8月5日 関係性づくり、進め方



8月6日～7日 3つのアクション



#### 6.4 未来の居場所を考えるワークショップ

ワークショップの流れは①ストーリーテリング、②フューチャーセッション、③バックキャストイング、④クイックプロトタイピング、⑤プレゼンテーションとした。また、手法、技術は①バズセッション、②ブレインストーミング、④KJ法、⑤ワールドカフェである。

なお、KJ法は、①アイデア出し・情報収集（各自で行う）、②カード化（考えたことをカードに書き出す）、③アイデアの共有（カードを模造紙に貼付し、説明）、④グルーピング（貼付されたカードを分類し、関連するもの同士をグループ化する）、⑤概念化（グループ化された情報に見出しをつけ、新しい概念を発見し、場合によっては再構築する）、⑥文章化（発見されたテーマや概念を文章にまとめる）の流れで実施している。

8月8日・9日午前中 ワークショップ



## 8月9日午後 プレゼンテーション



### A班 「見守り」から「理解」へー若者と大人が共に歩む鹿角ー

ヒアリングで中高生の多くが、家庭でもない、学校でもない、地域コミュニティの居づらさを感じていた。コモッセは、声を出して会話したり、談笑すると、周りの大人から怒られる、学校に通報される。街中をカップルが手をつないで歩いている、問題視されてしまう。この気づきから「見守り」から「理解へ」というテーマになっている。また、一方的に、大人の過度な見守り、監視行動を問題にするのではなく、自分たち中高生も自分たちのことを大人に分かってもらう努力、コミュニケーションをしなければならないとしている。

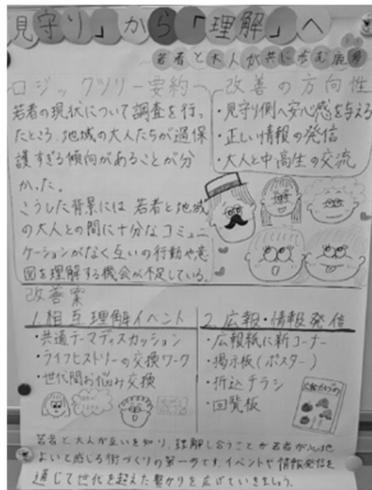
### B班 帰る理由を忘れる場所 in 鹿角

ヒアリングで中高生の悩みを丁寧に聞き取っている。人目につく、利便性が良くない、家族の協力ができない、一人でくつろげる場所がない、充電できる場所がないなど、中高生が切実に感じている悩みである。つまり、これまでの大人には、中高生対策として「人目につかない場所」、「利便性を良くする」、「家族の協力がなくてもできる」、「一人で入れる場所」、「充電できる場所」を整備するという発想はない。ここを乗り越えることができるかが、大人に課せられた宿題であるが、B班では中高生のニーズに応えるレンタルスペースを具体的に提案している。

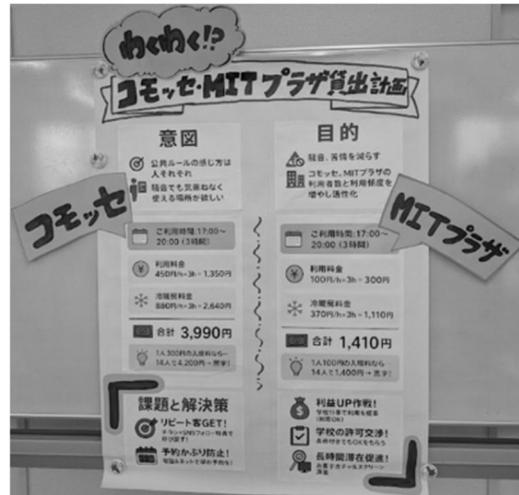
### C班 わくわく!? コモッセ・MIT プラザ貸出計画

中心市街地の中高生の居場所として、コモッセとMITプラザの活用を具体的、実用的なプランとしてまとめている。それだけでなく、ヒアリングにより受け取った様々なニーズ、ウォンツを鹿角市の地域別に落とし込んだ。鹿角市の中心を花輪とした上で、尾去沢は自転車、徒歩で中心市街地に来れるが、八幡平、十和田になると車に頼らざるをえない。スポーツができる広い場所は中心市街地よりもそれ以外の地域の方が適当であるなど、今後の公共施設の整備計画の参考にもなる要素がある。

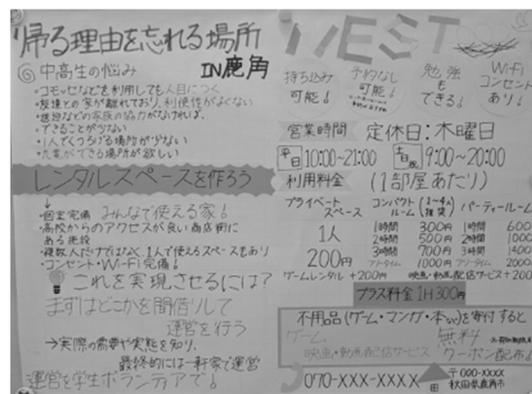
A 班



B 班



C 班



7. まとめ

「可愛い子には旅をさせよ」、このことわざが意味するところは、昔の旅は今と違って交通が不便で辛いものだったので、可愛い子には旅をさせて、世の中の苦しみや辛さを経験させた方がその子の将来のためになるというものである。この教訓は、現在でも十分、通用する。進学や就職で鹿角を離れ、様々な経験をすることで、人間として大きく成長させてくれる。鹿角市に大学がないことを逆手にとれば、鹿角市の中高生の多くは親元を離れ、大きく成長するチャンスがあるということになる。

鮭は、メカニズムには諸説あるが、生まれた川に戻るという習性がある。鮭は1月～3月の寒い時期に川の上流で孵化し、豊富な餌(プランクトン)を求めて春になると海へ向かい、広い北の海を回遊して数年で故郷の川に戻ってくる。しかし、その回帰率は1%程度だそうである。

魚と人間を一緒にするわけではないが、戻る、戻らないという現象は同じである。現状でも鹿角市ではある程度のUターンが毎年あるが、魚と人間の違いは、心があることである。

中学生、高校生の多感な時代に素晴らしい経験をすることで、故郷に対するポジティブな意識が強くなり、自分の夢を叶えるために、鹿角市を離れても、いつかは戻ってきてくれる可能性が高くなる。その素晴らしい経験は、もちろん、家庭でも、学校でも、既存のコミュニティでもできる。

しかし、中高生アンケート、ヒアリング、今回のワークショップの各班の提案内容からすると、中高生たちが自然と集まり、自由に活動できる、多少騒いでも文句を言われない居場所が求められている。確かに、勉強したい者は、既にコモッセ、図書館など静かに学習できる場を利用できるが、友達と飲み物を飲みながら談笑できる場、遊べる場、歌える場所、体を動かせる「わくわくが生まれる居場所、GOOD PLACE」はない。また、若者の GOOD PLACE でどんなことができるかは中高生が自ら考え、中高生が主体的に運営し、大人は必要最小限の見守り（絶対的監視ではない）という場ではないだろうか。

来年度は、今年度のまとめを再度整理した上で中高生のインサイトを形にする方法を考えていきたい。

〈参加者の気付き〉

今回のプログラムに参加した気づき等を大学生はレポート、中高生は感想文としてまとめた。

## 1. 発展 FS「鹿角市中心市街地」に参加して（レポート）

### 1.1 データサイエンス学部データサイエンス学科4年 濱崎 麗奈

今回、鹿角市でのフィールドワークを通じて現地の中高生と直接交流し、共に地域課題について考えるという貴重な体験を得た。その中で私が最も印象深く感じたのは、自身がこれまで当たり前と捉えていた若者の自由な行動や日常的な寄り道といった価値観が鹿角の中高生には居住面などでハードルが高く、想像を超える制限の中で生活しているという事実だった。特に地域住民が若者の行動を監視し、些細なことでも学校に通報されるというエピソードには強い衝撃を受けた。このような状況においては、若者が主体的に自由な行動を取ることが難しくなり、当然ながら放課後に立ち寄れる居場所や気軽に会話できる空間が極端に限定されてしまっている。これは物理的な居場所の問題にとどまらず、精神的・社会的な孤立にもつながりかねない重大な課題だと感じた。一方で大人たちがこうした監視的な姿勢をとる背景には、地域全体で子どもを守り育てようとする善意や責任感が存在していることも理解できる。つまり、問題は誰かの悪意によって生まれているのではなく、若者の自由を尊重したいという視点と地域社会の秩序を保ちたいという視点の間に、大きな価値観のギャップがあることに起因している。だからこそどちらか一方が我慢するのではなく、両者が対話し相互理解を深めながら新しい関係性を築く必要があると考えた。

この認識のもと私たちの班では、若者と大人の価値観を擦り合わせる機会の創出を改善策として提案した。例えば、若者が自分たちの思いや価値観、活動を地域の大人たちに共有する相互共有型トークセッションや情報媒体を通じた情報発信を定期的に行うことを提案した。このような場に行政職員や学校の先生、地域住民などを巻き込むことで、相互理解の土壌を育てることができると考える。さらに、こうした取り組みは単に場を用意するだけでなく、若者が主体的に関われるように企画段階から参加させることが重要であると考えた。自分たちが意見を出し反映される経験は自己効力感の向上にもつながり、まちとのつながりを実感させる要因になる。これは、鹿角市が現在目指している「若者が地域に関心を持ち、将来的にUターン・定住していく」というビジョンとも合致すると考える。今回の体験を通して私自身が当然と思っていた価値観が、地域や背景によって大きく異なることを実感できたことは大きな学びだった。そしてそのギャップを乗り越える鍵は、「居場所」という空間だけでなく、価値観をすり合わせる「時間」や「対話の機会」にあると感じた。鹿角市における居場所づくりは、外面整備だけでなく、地域社会の関係性の再構築という内面の改革にも目を向けるべきだと強く感じた。

## 1.2 グローバル学部日本語コミュニケーション学科4年 田川 蒼太

私は秋田県鹿角市で10日間のフィールド・スタディーズを行い、若者たちのグッドプレイスを検討した。その中でもっとも強く感じたのが、若者が放課後に集まることができる娯楽施設や学習スペースのような「場所」を新しく作ることで若者たちのグッドプレイスを増やしていくということもそうだが、最終的な目的である鹿角市から出て行ってしまった若者がまた鹿角市に帰ってこようと思えるようなきっかけとなるグッドプレイスとは、「場所」ではなく「人々との結びつき」なのではないかということだ。

私は10日間鹿角市で生活をして、いい意味でも悪い意味でもそこに住んでいる人々との交流が自分の住んでいる千葉県よりも強いと感じた。例えば、私たちを10日間見守ってくれていた鹿角市役所の方々は、私たちのような外部の人間をずっと親身になって支えてくれたし、旧関善酒店の方や鮎釣りをされている方々など地域の方々もとてもフレンドリーで一緒にお酒を飲んで話したり、鹿角市についてたくさん教えてくれたり10日間の間で本当に多くの人と関わりを持った。このようにそこに住む人々と強く関わるということに自分は今まで経験がなかったのでとても楽しかったし、鹿角市に対する愛着が関わってくれた人たちのおかげで強くなった実感がある。このような地域の人々に対する愛着や結びつきによって、鹿角市自体が鹿角市に住んでいる若者たちにとってのグッドプレイスになるのではないかと強く感じた。しかし、10日間生活をしている中で、住んでいる人たちとの距離が近いことで若者が感じる窮屈さの片鱗も多く感じた。高校生の多くは放課後に集まる場所がなく、一つの大きな公共施設に集まるのだが、そこは鹿角市に住む大人も多く利用する場所で頻繁にそんなことで？ということによって高校生が学校に通報をされてしまうそうだ。通報をされてしまうこともそうだが、私が住んでいる千葉県に比べて大人との距離が近すぎて、高校生が高校生だけの空間で何かを楽しむということが難しいという点に問題があると感じた。このような環境では鹿角市自体に窮屈という感情を抱いてしまうのも仕方ないと感じたし、鹿角市以外が自由だと感じ外に出ようとするのも仕方がないことだと感じた。そのような部分は改善をしていく必要がある。

私は外の人間として鹿角市の人々と10日間関わり、人々の温かさや優しさを強く感じ、鹿角市のことを好きになったし、また鹿角市に足を運びたいという気持ちが強く芽生えた。今鹿角市に住んでいる若者たちが一度は鹿角市の外に出たとしてもまた鹿角市に戻ろうと思うためには、このような人々との結びつきによって、鹿角市自体をグッドプレイスとして、「愛着のあるふるさと」として感じられるようにすることが大切だとおもう。

## 1.3 工学部環境システム学科4年 山田 悠人

鹿角市の地域発展における若者と社会の関係の見直し

### 1. 序論

私は今回の発展FSを通じて、鹿角市では若者と高年世代での価値観の違いを感じる機会が頻発であり、それによる若者の地域離れが深刻であると考えた。若者の地域離れは伝統や

地域持続に根本から関わる問題であり、若者を移住させる街づくりが急務である。本レポートでは私の体験談を踏まえながら、鹿角市の課題を解決するために必要なことを分析していく。

## 2. 本論

ヒアリング調査では鹿角高校と MIT プラザを訪れ、学生と彼らを見守る教師や施設運営者から鹿角市に若者の居場所を作ることへの貴重な意見を聞くことが出来た。ヒアリングを行っていく中で、学生や子供たちからは「公共施設を利用したくても周りの目が気になって利用したくない」と回答している人が多かった。一方大人からは「子供たちが施設を正しく利用できていないから見守る必要がある」といった声が挙げられた。こうした意見から私は若者が自由に扱える場所を自分たちで運営し、施設を運営する難しさを若者が知る必要があると考えた。若者が施設の運営側に立ったことがないからこそ、大人たちの思いが伝わりづらく過剰な監視につながっている可能性が高いからだ。また 11 日の自由探索の日には稲荷神社を訪れた。稲荷神社は花輪ばやしの神輿による町内 1 周のスタート地点とされており、敷地内にも馬の置物や社がたくさん設置されていた。しかし大きな鳥居が市内に設置されており休日だったにも関わらず、参拝客はほとんど見受けられなかった。この背景から私は若者が神社を手入れしたり、神社をアピールするイベントを行ったりすることで、若者が地域の伝統文化に興味を持つと考えた。

## 3. 結論

結論として鹿角市はこうした若者と社会の関係の欠点を放置していることで地域発展を妨げている。こうした若者と社会の関係性を向上させるためにも、若者が自主的に地域に関心を持つような取り組みが必要だと考える。若者が自分たちで地域を盛り上げる中で、地域の発展に必要な物を見つけるきっかけになるからだ。発展 FS を踏まえ、自分も現在住んでいる地域の課題や特徴に興味を持つようになった。たくさんの若者が自分の住んでいる地域に関心を持てば、日本をより住みやすい国に変えていけるだろう。自分もその一人として、これからの社会と若者の関係を深めていきたい。

### 1.4 グローバル学部グローバルビジネス学科3年 鈴木 董

#### 1. 序論

今回の鹿角市地域活性化発展フィールドスタディーズに参加し、現地の空気に触れたことで、地方都市の温かさと同時に狭いコミュニティ特有の息苦しさも感じた。実際に鹿角市に足を踏み入れた際、人口減少と若者流出が進む中で、特に「若者の居場所不足」と「大人との意識のギャップ」が深刻な課題として浮き彫りになった。本レポートでは、大人の厳しい視線が若者の自主性を阻害している点に焦点を当て、相互理解を軸とした解決策を検討する。

#### 2. 本論

まず、若者が安心して滞在できる場所は限られている。コモッセや MIT プラザといった

若者も集まる施設はあるが、飲食や勉強が自由にできず、利用の制約が大きい。費用や時間的な制限も加わり、居場所不足を感じさせている。また、管理体制の不十分さがトラブルの懸念を生み、大人側の不安を強めているように見えた。

次に、大人と若者の意識のズレが関係を悪化させていることが高校生や地域住民へのヒアリング調査から分かった。狭いコミュニティだからこそその大人は高校生に対する秩序を重視する一方、若者は自由さを求めているため、厳しい目線は若者の「居づらさ」となり、地域社会から距離を取る原因となっている。しかし、ヒアリングの中で大人の中には若者の自主活動を支援したいという声もあった。調査の結果から、解決には若者がルール作りや運営に関わり、大人がファシリテーターとして緩やかに見守る仕組みが有効であるのではないかと考える。例えば「ユーススペース」構想では、Wi-Fi や飲食可の自由な空間を整え、当番制などを導入することで、責任と自由を両立させることが可能となる。以上の点から、課題の核心は「物理的な不足」以上に「相互理解の欠如」にあるといえる。

### 3. 結論

鹿角市の課題は、若者の居場所不足よりも、大人と若者の間の意識のギャップにあると考える。厳しい視線は若者の自主性を妨げ、地域社会からの孤立を招いている。しかし、協働的な仕組みを導入すれば信頼関係を育むことができる。ユーススペースの整備や共同運営の工夫を通じて、若者の自由と責任の両立を促すことが、若者世代を地域に繋ぎとめる道であるのではないか。以上のことから、これらの課題に対する取り組みは鹿角市の持続可能な活性化に直結する課題である

## 1.5 人間科学部人間科学科3年 石橋 祐弥

### 1. 序論

地方における若者の人口減少は問題視される。その原因がどのような部分に存在するのかを認識する必要がある。今回8月3日から14日の10日間、秋田県鹿角市にて行われた「鹿角市中心市街地活性化」に参加し、「若者にとってのGOOD PLACE」とはどのような場所であるかを調査した。本レポートでは、活動からの気づき、鹿角市の課題および解決策を述べる。

### 2. 本論

今回のプログラムにおいてそれぞれ行ったこと、その気づきについて述べる。

#### 2.1. 旧関善酒店での居場所展開

居場所の展開として、麦茶やお菓子の設置、手書きのポスターや卓上に設置するメニューやイラストの作成を旧関善酒店にて行った。こもせという特徴的な建物の作りと、小休憩ができる雰囲気づくりは効果があったのか、普段よりも来店数が多くなった。班員が作成したポスターやイラストはどれも目を引くようなデザインであり、手作りであるからこそ感じられる温かみもあり非常に印象的であった。実際に立ち寄った方からも高く評価され、制作物の効果を認識できた。

## 2.2 若者に届く情報と発信

旧関善酒店についての説明を受け、若者に対してどのようにアプローチするかを思考した。個人的にこの場所は建物やその背景、展示が非常に興味深かった。しかし、若者向けであるかというやや対象年齢が高く感じた。そこで現状を踏まえ、今あるもので実現性が高いものからどのような提案ができるか考えたところ、ミニチュアやピアノを再利用するような案や、暖簾のリニューアルなどが挙げられた。複数人かつ少々年齢が離れているメンバーでの考案は様々なアイデアが発生する効果があり、異なった思考を持つ人との活動をするこの重要性を学ぶことができた。

## 2.3 ヒアリングによる調査

現地の若者(主に中高生)にヒアリングを行い、普段利用する施設とその理由、放課後や休日の過ごし方、鹿角市がどのような場所かなどを調査した。

回答の特徴として、施設利用の理由に「ここ以外にあまり選択肢がない」「近い」が多く挙げられていた。また、放課後には「家で過ごすかコモッセで勉強する」という回答が多く、休日は「大館市に行ってしまう」という回答が比較的多くあった。

また、プログラムの活動中において、とある若者(参加者)から「大人の目が厳しい」という声があがり、その声にならずく者も多くいた。調査中ではない状況であり、思いがけない発言ではあったが、インサイトとして若者が地方において感じているいづらさに「大人の目」や「監視の目」という可能性はあり得ると考えた。

## 3. 結論

居場所の展開やその居場所への興味を引く方法を学び、GOOD PLACE にするにはどのような方法が考えられるかを班員で一丸となって取りかかれたことは非常に有意義な経験だったと考える。また、前述したようにインサイト(と思われるもの)は思いがけないときに現れ、かつ問題の重要性に気づかされた。地方特有の人の温かさや人のつながりが場合によっては、若者にとっての GOOD PLACE から離れてしまっているという可能性を見い出せたことは鹿角市の課題の一つとして大きな収穫といえるのではないかと考える。

この課題への解決策として、安心を与える側と受け取る側の価値観の違いを認識するために、世代間を超えて話し合いをする場や交流会を設けること挙げる。与える側は自分中心の視点で相手が必要と思っている以上に行動していないか、受け取る側はどのような意図をもって相手が行動しているのかを認識できているかなどをそれぞれ思考し言葉にして表す必要があると考える。

## 1.6 グローバル学部グローバルビジネス学科2年 Pun Subhash Kumar

### 1. はじめに(序論)

秋田県にある鹿角市(人口約2.5万人)は現在、ゆっくりと衰退しつつある。伝統や文化に恵まれたこの市だが、地元の若者が自分たちの街に興味を持たず都市部へ流出しており、大学がないこともその一因となっている。その結果、転出者が転入者を上回り、市街地の商

店は COVID-19 以降、次々と閉店している。本報告書では鹿角市の現状と住民の流出要因、解決策の検討、そして「GOOD PLACE」構想の概要について述べる。

## 2. 現状

現在、鹿角市には大学が存在しない。鹿角高校を訪問して生徒の話を聞いたところ、多くが県外の大学卒業後に鹿角市に戻るつもりはないと答えた。市内に大学がないことが主因であり、高齢化が進むなかで若者の流出が止まらないままでは鹿角市の将来は暗いと言わざるを得ない。

若者は地域の将来を担う存在である。しかし、県外に進学した生徒たちに戻らない理由を尋ねると、「鹿角への愛着が薄い」と答える者が多かった。市に特別な思い入れがないため、他都市には金銭的な利点以上の魅力を感じ、そこにとどまろうとするようだ。

## 3. 提案された解決策

Ray Oldenburg の著書『The Great Good Place』に触発され、学生が自宅や学校以外で友人と時間を過ごし記憶を共有できる「GOOD PLACE」の設立を提案する。学生との意見交換では、地域交流施設「コモッセ」が学生の数少ない社交の場であることが明らかになったが、実際に訪れると学習中心の静かな雰囲気、娯楽の場とは言い難かった。そこで、学生たちが必要としているのは娯楽とわくわく感を提供する場所であり、それこそが「GOOD PLACE」が目指す姿である。

## 4. 結論

学生の要望を把握できた今、彼らに向けた「GOOD PLACE」の創設に向けて動き出せる。武蔵野大学チームでは、軽食付きの映画鑑賞スペース提供や、監視者なしで利用できる低価格レンタルスペースなど、実行可能なアイデアをいくつか提案した。しかし現実には、これらの多くが収益面で成り立たず、また過去に同様の試みが具体的成果を上げなかったため、鹿角高校生の信頼を得るには至っていない。

それでも私たちが望むのは、次世代がこの取り組みを引き継ぎ、実現に向けて動いてくれることである。「GOOD PLACE」が若者に鹿角でのわくわくする思い出を提供することで、結果として県外の大学を卒業しても鹿角に戻りたいと思うきっかけになればと考えている。アイデアのバトンは私たちの世代から次の世代へと渡された。これらのアイデアが現実となることを願っている。

## 1.7 法学部法律学科 2 年 高平 倖輔

### 1. 序論

今回の発展 FS を通じて、鹿角市の地域社会の在り方について考える機会を得た。地域の人たち同士の結びつきが強く、減少している若者を地域の大人たちが見守る文化は大きな安心感をもたらしている。しかし一方で、その結びつきが過度になると、若者にとって居づらさを生み出していることに気付いた。本レポートでは、鹿角市の若者を取り巻く空気感に

注目し、その課題と解決策を考察する。

## 2. 本論

鹿角市の中高生に対して行った調査によって明らかになったのは、大人が若者の行動を細かく気にかけすぎている傾向である。例えば、中高生のカップルが寄り添っているだけで大人の目が向けられたり、バス停のベンチで勉強しているだけで通報されたとの話が上がった。これらはすべて、地域の大人たちの「若者を見守る」という意識の延長にあるものであり、結果として若者の自然な行動を委縮させ、自由に過ごせる空気を奪っている。このような状況では若者が地元で過ごしづらさを感じてしまい、進学や就職を機に市外へ流出してしまう一因となりうる。

## 3. 解決策

課題を解決するためには、まず「見守り」と「干渉」を区別する意識を地域で共有する必要がある。そのうえで、若者が大人の目を気にせずに自由に集まり活動できる場を設けることが重要であると考えられる。

また、若者と大人たちのコミュニケーションを増やすことも重要である。地域の大人が若者の行動を「不審」と早計に判断し、確認を経ずに通報に至るのは、過度に防衛的な対応であり、若者との信頼関係を損なう要因となっている。若者と大人との間で日常的なコミュニケーションが活性化すれば、相互理解が深まり、不必要な通報は減少すると考えられる。

## 4. 結論

鹿角市の強みである地域の結びつきは、裏を返せば若者を居づらくさせる要因にもなりうる。過保護さを和らげ、若者が自然体で過ごせる環境を整えることが、地域の未来を支える人材をつなぎとめる鍵となる。今回の発展 FS を通じて得た気づきを踏まえ、地域全体で「若者の居場所づくり」に取り組む必要性を強く感じた。

### 1.8 人間科学部人間科学科 2 年 長埜 璃緒

#### 鹿角市における若者と大人の心理的距離

##### 1. 趣旨

10 日間の発展 FS を通じて、鹿角市は人との精神的な距離が近いことが第一印象として挙げられる。コモッセなどの公共施設を利用する際に、同級生や地域の方の目が気になるという声を頻繁に聞いた。この課題の解決案を提案するにあたって、ヒアリング調査を実施した。人の目が気になることにより、一人でいても一人でいるように感じられないのは、緊張感があり、心理的負担を伴うものではないかと考える。本レポートではこの課題の解決策を述べるが、鹿角市に住み、または市内の学校に通う中高生の中には、「今のままの鹿角で十分」「新しい居場所は求めている」という意見も散見された。そのため、これらの中高生の意見を尊重しつつ、鹿角市の魅力や地域的特性は損なわないことを前提に、自分なりの解決策を検討することとする。

##### 2. 近すぎる精神的距離

精神的な距離が近いというのは、信頼感や安心感、相互理解という利点に繋がる一方で、相手のパーソナルスペースに踏み込み過ぎてしまうリスクも考えられる。一例として、花輪ねぶたや花輪ばやしなどの地域行事を通じたコミュニティ活動が豊富であるからこそ、地域の大人との心理的距離が近くなるのだろう。そして、大人の声として地域の大人の役割は、同じ土地に住む若者を見守ることであるという意見を受け取った。過剰に見守られるのが窮屈に感じる中高生と大人として、役割を全うする必要がある大人。この若者と大人の意識のギャップがこの問題を生じさせていると思われる。自分の住む街に安心感は生まれるかもしれないが、若者の行動が制限されてしまえば、「危険から守る」という本来の目的と大きく異なってしまうだろう。

### 3. 中高生と地域、大人との適度な距離

この課題への解決策として、若者、特に中高生が地域の運営に主体的に関わる機会を設けることが適切であると考えた。これはお祭りに限らず、様々な地域活動を対象とする。大人は過剰に介入せず、存在を示す機能となることで、中高生は安心感を得ながらも心理的負担を抑えて活動することができる。これは大人との精神的な距離を適度に保ちながら、中高生の「自由」を感じられるきっかけになるのではないかと考えた。この自由が発展して、両者の意見を共有し合える環境に繋がれば尚更良い。地域の中での繋がりが首都圏と比べて非常に強い分、大人と若者の意見交換はしやすい環境下にあるだろう。あとは、若者がどれだけ自由に意見を述べられるかが鍵となる。

### 4. 若者にとって居心地の良い地域に向けて

若者の自由な意見と大人の客観的な意見の両方が尊重され、両者が共によりよい地元を築いていくためのアクションを起こすことができれば、鹿角市だからこそ可能なこの強い繋がりを強みとして活かすことができるだろう。また、体験というお客様の立場ではなく、鹿角市に貢献する一人の者として役割を担うことで、大きな自信を得られたと自分自身も実感した。提案した解決策が実現されれば、参加した生徒自身も確かな経験と自信を得ることができると見込んでいる。

## 2 「わくわくが生まれる”居場所づくり」に参加して（感想）

### 2.1 秋田県立鹿角高校3年 小館 向日葵

この活動を通して、今まで考えたことがなかった鹿角の課題をしっかりと考えることができた。ただ鹿角のことを考えるのではなく、グッドブレイスを提案することだったので、普段の考えや行動を細かく思い出し、言語化して伝えることができた。実際に中高生にインタビューをしてみても、予想とは違った回答におどろいた。そのことを含めて、市民の意見を聞くことの大切さを学んだ。自分の考えを言うのは苦手だが、少しでも仲を深めたいと思い、自分から進んで話しかけることをがんばった。よりよい鹿角市にするために沢山の意見をだすことができた。

この活動を通して、鹿角のことや取り組みをくわしく知ることができたので、それを生かして将来の職に役立てたいと思った。そして、普段からあまり意識して鹿角市を見ていなかったと思ったので、常に色々なところに視野を向け沢山のことを感じて生活したいと思った。

## 2.2 秋田県立鹿角高校3年 多賀谷 はるか

このプログラムを通して鹿角市が暮らしやすいまちになるようにさまざまな視点から深く考えることができました。

放課後や休日に遊べる場所が少ないことや、人の目を気にして自由に過ごせないことを普段から少なからず感じており、同じことを考えている人も多かったです。思っても行動にうつす機会がこれまではなかったのですが、壁新聞をつくり地域の方々に発表することができ、とても貴重な体験になりました。

また、大学生や小暮先生、市の職員の方などたくさんの人と交流し、自分の意見も共有できました。私は自分の意見を伝えることが苦手でこのような機会やボランティアなどがあっても参加してきませんでした。ですが人と関わること、自分の意見を話すことを楽しいと感じることができ、またこのような機会があったらぜひ参加したいと思います。

鹿角市に GOOD・PLACE が増えるよう考え続け、鹿角市のことを好きでい続けたいです。

## 2.3 秋田県立鹿角高校3年 木村 芽生

今回実施されたかづの未来アカデミーでは、鹿角の若者が自由な選択肢を持ち、社会とつながりながら生き生きと過ごせる居場所「GOOD・PLACE」の在り方について深く考えることができた。鹿角市の現状や若者の居場所に必要な要素、課題を学んだ上で、実際にヒアリング調査を行った。

自ら同年代や地域の方々へインタビューすることで、これまで気づけなかった視点から鹿角の利点を多く見いだすことができた。それを基に作成した課題解決案は、世代を問わず若者も一体となり地域全体が盛り上がる糸口になると考える。

鹿角市には他の地域にはない利点が多いが、十分に発揮されず潜在化している。将来的には、今回の学びを生かし、自らが主体となって地元鹿角の活性化に取り組んでいきたいと考えている。

## 2.4 秋田県立鹿角高校3年 土舘 市果

私は高校3年生の夏に、かづの未来アカデミーに参加できてよかったです。大学生と協力して街中でアンケートを行い、最後には市長の前で鹿角市をより良くするための改善案をプレゼンしました。この活動に参加できたことは私にとって新たな視点を持つきっかけとなりました。普段の生活では気づけなかった鹿角の魅力をたくさん見つけることができたと同時に、この市の課題にも気づくことができました。以前は、鹿角の大人は冷たいと感じることが多かったけれど、実際に活動を通してみると若者の意見を取り入れようとする政策や取り組みがたくさん行われていることを知りました。この経験を通して鹿角には温かい人々と可能性であふれていることに気づき、地元を誇りに思う気持ちが強くなりました。

これからは私もその一員として、鹿角の未来に少しでも貢献できるような人材へと成長していきたいです。この活動に参加して本当によかったです。ありがとうございました。

## 2.5 秋田県立鹿角高校2年 海沼 実羽

かづの未来アカデミーで、学校や家庭以外の「グッドプレイス」を考える活動に参加して、安心できる雰囲気の中で挑戦できたことで、自分の考えを積極的に伝える力がついたと思う。協力して意見を出し合う大切さも学ぶことができたと思う。また、普段は意識しない地域の施設も居場所になれると気づくことができた。これからは、この学びを鹿角市で生かし、世代をこえて誰もが安心して過ごせる居場所づくりに関わっていきたいです。そして、自分自身も地域の一員として、人と人がつながりやすいまちづくりに貢献していきたいと思いません。

## 2.6 秋田県立鹿角高校1年 成田 裕帆

今回参加してみて、グッドプレイスというものを初めて知りました。他の地域の事例を聞いて鹿角市でも出来るかもとも思いました。

初日に私は鹿角高校にヒアリング調査に行き、その際、私と同じような意見も少し違うような意見もたくさん聞きました。どちらの意見にも深掘りして聞くことができました。試験的に旧関善酒店さん前でグッドプレイスを作った時に、来る高校生に話を聞いていると、「もし鹿角にグッドプレイスがあれば行きたい。」という声が多かったです。そして紙媒体のほうで確実に情報が届くということも改めて知れました。そして、グッドプレイスを作るとともに旧関善酒店さんの情報発信についても考えました。課題の発見から解決の糸口を考えました。コストが高くなってしまふことを避け、なるべく人が集まる方向で考えました。小中高生が集まる場所にしたいという勝山さんの思いを聞いて、より頑張ろうとも思いました。私一人でできることは少ないですが、今回のことを生かしてたくさんを経験していきたいと思っています。

## 2.7 鹿角市立八幡平中学校2年 館花 莉奈

私は、かづの未来アカデミーを通して、鹿角市の取り組みや、他地域の街おこしの方法など、たくさん知ることができた。花輪の街には、MIT プラザなどの施設があるにもかかわらず、あまり使われていなかったり、認知度が低かったりなど、たくさん問題があることが分かった。それを改善するためにヒアリングをし、声を聞いて発表にも生かすことができた。

鹿角市で生かしていきたいのは、最終日に行った発表したことだ。私たちの班では、市民の目について発表したが、他の班の発表からも、これが実際にあったら便利だな、あったら絶対行っているな、というものもたくさんあった。これらを生かしていくと、若者が残れるようになると思う。また、ヒアリング活動を通して、たくさんの人に意見を聞きたいときに生かしたいと思った。"

## 参考文献

- 稲垣円(2023)「何が「地域愛着」を育てるのか」第一生命経済研究所 LIFE DESIGN REPORT  
The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Bookstores, Bars, Hair Salons, and Other  
Hangouts at the Heart of a Community (English Edition) Kindle 版
- 柳田国男(1929)「都市と農村」岩波書店
- 渡辺尚志(2015)「百姓の力 江戸時代から見える日本」角川ソフィア文庫
- 保母武彦(2013)「日本の農山村をどう再生するか」岩波書店
- 富田和暁(1991)「経済立地の理論と実際」大明堂
- ワーク・モチベーション研究所(2023)「地域への愛着と地域活動へのモチベーションに関する調査」株式会社 JTB コミュニケーションデザイン
- 斎藤実則(1979)「鉱山衰退に伴う地域社会の変容—尾去沢鉱山 K.K. の場」東北地理 31
- 神崎由紀(2013)「地域で暮らす高齢者の見守りの概念分析」日本看護科学会誌 Vol. 33
- 黒宮亜希子(2015)「地域における見守り活動の現状に関する一考察」吉備国際大学研究紀  
要第 25 号
- 閣議決定(2025)「地方創生 2.0 基本構想」
- 内閣府政策統括官(2024)「地域課題分析レポート～ポストコロナ禍の若者の地域選択と人口移動～」
- 秋田県鹿角地域振興局(2025)「鹿角地域の概要 2025」